

琵琶湖の夏 高尾ひとみ

この夏、琵琶湖の湖西から湖北を訪ねました。稲は青々と伸び、夏草は茂り、風が吹き、鶯がよく鳴いていました。人は、そうした自然の中で暮らし、柔らかに語ります。

草も木も鳥も魚も、琵琶湖には前からあったものが今もずっと残っています。こうしたところにいるときの気持ち、心が落ち着くとさうのうでしようか。

そんな心でここに居ると、不思議と匂が生まれます。そんな琵琶湖にまた行きたくなってきました。

母の背に隠れて築を子が覗く

幾たびも鶯の降りては鮎掴む

涼しさよ夕べの浜に腰おろし

花木僅夜の湖の波の寄せ

菅浦の夏の盛りの家並かな

湖へ歩けば過ぎり夏の蝶

菅浦に釣る少年や雲の峰

泳ぎ子に時をり鶯の鳴きにけり

雷雨去り波止を出てゆく船二艘

コスモスに波音高き琵琶湖かな

《作品鑑賞》

暁子

琵琶湖は日本の歴史や文化と深い関りがあり、また、自然の壮大は言うまでもありません。そんな湖の夏の盛りを詠まれています。

母の背に隠れて築を子が覗く

幾度も鶯の降りては鮎掴む

湖の築漁はどんなものなのでしょう。恐る恐る母の後ろから覗く幼子や、その鮎目がけて急降下する鶯、滅多に見られない景色に感動する作者を想像するに難くありません。

菅浦の夏の盛りの家並かな

菅浦に釣る少年や雲の峰

「菅浦」の地名が生きています。湖と山の狭間の家並みは何時代のものでしょう。峰雲が映る湖に竿垂れる少年の健やかな姿も目に浮かびます。少年には夏が似合います。

高島幼稚園 村上正人

私が五十五年前入園した福山市立の幼稚園である。県道二十二号線を福山駅方面から鞆の浦へ向かうと、海岸に沿う手前の田尻町に園舎はある。近辺については昭和初期まで、神武東征伝承上の吉備高島宮比定地のひとつであった(のちの昭和十三年に宮は現岡山市南区宮浦と定められた)。また、初代福山藩主水野勝成が島原の乱鎮圧のため軍船「大転輪丸」を建造し、約六千の軍勢で出帆したのが今は園庭となっている場所だったという。恥づかしながらも最近になって知った。久しぶりに訪れると、かつて園長先生がカブトガニを見つけて我々に見せてくれた海や、当時はとても高い山の上と感じた八幡神社がなくなっている。ただ園児減少のため三年前より休園し、以来、園舎は地域交流に使用されているとのことだ。

白木 謹明け方の雨留めけり

浜辺へと駆けてゆく子の素足かな

園児るぬ園庭広し夏の昼

園庭の遊具に夏の日差かな

老鷹の声を聞きつつ坂上る

緑蔭を探し見てる鞆の浦

園舎へと下る坂道草いきれ

あきあかね園舎の屋根を巡りをり

いくつもの水輪をつくり目高かな

夏の日の船入跡の暮れにけり

《作品鑑賞》

あきみ

夏の早朝、かつて学ばれた幼稚園を約五十年振りに訪ねられた。作者が学んだ時期、日本は高度経済成長期であり、生活も豊かであり、街は活気に溢れ、子供も多い由緒ある幼稚園だった。その幼稚園は休園となり、現在は地域の交流の場になっている。今の光景に加え、かつては何気なく見過ごしていたものにも淋しさが想像される。

白木 謹明け方の雨留めけり

白木 謹は一日花。この句にも何か微妙な気配を感じた。

園児るぬ園庭広し夏の昼

かつて園児でいっぱいだった頃を回想する。当時の温かさ、今、ご自分の淋しさを秘めながら、最新の注意を払いつつ、次の句へとつないでいる。

あきあかね園舎の屋根を巡りをり

次の句への組み合わせ、関係性も新鮮である。どの言葉の中にもご自分の位置がはっきり見え、言葉にはさまさまな表情が隠れている。

夏の日の船入跡の暮れにけり

今、目の前の海に夕日が沈もうとしている。かつての船入跡。昔を偲びながら涼風が立ちはじめている。少子化とコロナ禍の波は幼稚園にも押し寄せており、本人の喪失の実感が読みとれ、最後を上手に締め括られた作品である。